博士論文（要約）

論文題目 養子縁組の社会学――血縁をめぐる人々の行為と意識

氏 名 野辺 陽子

目次

はじめに
１．問いの設定――家族社会学が血縁を主題化する意義
　１－１．血縁の浮上――生物学的本質への回帰？
　　１－１－１．親子形成過程における血縁
　　１－１－２．親子形成後における血縁
　１－２．血縁の浮上に関する社会学的説明とその限界
　　１－２－１．所与としての血縁の限界
　　１－２－２．「主義」としての血縁の限界
　１－３．分析対象としての〈血縁〉――説明項から被説明項へ
　　１－３－１．文化人類学の視点の導入
　　１－３－２．実践される〈血縁〉
　１－４．〈血縁〉の政治
　　１－４－１．社会的文脈
　　１－４－２．〈血縁〉と他の知・言説との関連
　　１－４－３．〈血縁〉を資源とする関係性と自己
　１－５．本稿の事例と用語説明
　　１－５－１．「子どものため」の養子縁組
　　１－５－２．用語の説明
　１－６．本稿の構成
２．養子縁組研究の批判的検討と本稿の分析視点
　２－１．養子縁組と〈血縁〉をめぐる課題
　　２－１－１．水準／指標／基準の混乱
　　２－１－２．行為と意識を等値する解釈図式
　　２－１－３．血縁の擬制の解釈
　　２－１－４．実親子関係の等閑視
　２－２．養子縁組と「子どものため」をめぐる課題
　　２－２－１．血縁モデルから養育モデルへ？
　　２－２－２．客体＝援助対象としての養親子
　２－３．本稿の分析視点
　　２－３－１．差異化の実践
　　２－３－２．選好と制約
　　２－３－３．親の視点と子どもの視点
　　２－３－４．定位家族と生殖家族
３．対象と方法

３－１．制度
３－１－１．対象とする養子制度の類型
３－１－２．使用する文書資料
３－２．当事者
３－２－１．親世代へのインタビュー調査の概要
３－２－２．子世代へのインタビュー調査の概要
４．特別養子制度の立法過程におけるレトリック
４－１．立法の経路依存性
４－１－１．現行の条文
４－１－２．立法の背景と制約条件
４－２．主な論点と論争のレトリック
４－２－１．「子どものため」と戸籍の記載
４－２－２．「子どものため」と実親子関係の法的断絶
４－２－３．「子どものため」と離縁
４－２－４．「子どものため」と家庭環境
４－３．考察
４－３－１．「子どものため」とは何か？――論点と引用される専門家言説
４－３－２．戸籍制度と「子どものため」の合致
４－３－３．親子関係の包括性と子どもの「アイデンティティ」の分節化
５．特別養子制度と隣接領域の差異化と影響関係
５－１．各選択肢間の関係性
５－１－１．重なり合う領域
５－１－２．統計的推移
５－２．各選択肢の理念と運用上の条件
５－２－１．特別養子制度
５－２－２．里親制度
５－２－３．不妊治療
５－３．考察――「子どものため」／親子関係／〈血縁〉の関連のバリエーション
６．親世代の行為と意識①――養子縁組が選択／排除されるプロセス
６－１．ケース概要と本章の分析視点
６－１－１．調査の概要
６－１－２．ケースの概要と分布
６－１－３．分析の視点
６－２．分析①――夫婦間の不妊治療・子どものいない人生との比較
６－２－１．養子縁組を選択したケース
６－２－２．夫婦間の不妊治療・子どものいない人生を選択したケース

６－３．分析②――第三者の関わる不妊治療との比較
６－３－１．第三者の関わる不妊治療を選択しなかったケース
６－３－２．第三者の関わる不妊治療を選択したケース
６－４．分析③――里親との比較
６－４－１．養子縁組を選択したケース
６－４－２．里親を選択したケース
６－５．考察
６－５－１．養子縁組を選択すること／選択しないことと〈血縁〉
６－５－２．子どもを持つこと／子どもを育てることと〈血縁〉
６－５－３．関係性・自己と〈血縁〉
６－５－４．養子縁組の選択をめぐる制約条件
７．親世代の行為と意識②――親子関係の構築
７－１．ケース概要と本章の分析視点
７－１－１．調査の概要
７－１－２．ケースの分布
７－１－３．分析の視点
７－２．分析①――親子関係の構築
７－２－１．養親の葛藤①――親子関係の初期
７－２－２．養親の葛藤②――真実告知の場面
７－３．分析②――子どもの「アイデンティティ」形成の支援
７－３－１．実親と交流がないケース
７－３－２．実親と交流があるケース
７－４．分析③――スティグマのマネジメント
７－５．考察
７－５－１．「子どものため」の専門家言説と〈血縁〉の接合
７－５－２．実親に対するアンビバレンスとマネジメント
７－５－３．同化戦略と異化戦略の使い分けと社会規範の維持
８．子世代の行為と意識①――親子関係と「アイデンティティ」の構築
８－１．ケース概要と本章の分析視点
８－１－１．調査の概要
８－１－２．ケースの分布
８－１－３．分析の視点
８－２．分析①――親子関係の構築
８－２－１．真実告知が学齢期になされたケース
８－２－２．真実告知が青年期になされたケース
８－３．分析②――「アイデンティティ」の構築

８－３－１．共通点：実親に対する関心
８－３－２．差異点：２つの規範への態度
８－３－３．共通点：人間関係への配慮
８－４．分析③――実親を呼称する新たなカテゴリーの創出
８－４－１．共通点：実親は「家族」「親」ではない
８－４－２．差異点：実親は「他人」か「DNA レベルの仲間」か
８－５．分析④――スティグマのマネジメント
８－６．考察
８－６－１．血縁の内面化／相対化／マネジメント
８－６－２．親子関係と「アイデンティティ」の関連
８－６－３．「アイデンティティ」を通じた専門家言説の流入と新たな「病理化」？
９．子世代の行為と意識②――〈血縁〉の世代間再生産
９－１．ケース概要と本章の分析視点
９－１－１．調査の概要
９－１－２．ケースの分布
９－１－３．分析の視点
９－２．分析①――定位家族に関する経験の再解釈
９－２－１．生殖家族を形成したケース
９－２－２．生殖家族を形成していないケース
９－３．分析②――生殖家族に関する展望
９－３－１．生殖家族を形成したケース
９－３－２．生殖家族を形成していないケース
９－４．考察
９－４－１．〈血縁〉の再生産のメカニズム
９－４－２．世代間移行による意識の転換
１０．考察――養子縁組における「子どものため」/親子関係/〈血縁〉の関連
１０－１．法律における〈血縁〉と親子関係
１０－１－１．既存の家族観・親子観の維持と新しい類型の創出
１０－１－２．「実子」の意味の読み替え――差異か平等か
１０－１－３．親子関係と「アイデンティティ」の分離と血縁の人格化
１０－２．運用における〈血縁〉と親子関係
１０－２－１．批判的検証なき専門家言説の流入と流通
１０－２－２．規範化するオルタナティブ
１０－２－３．差異化と正当化の循環
１０－３．親世代の行為と意識
１０－３－１．子どもがほしい≠親になりたい≠血縁へのこだわり

１０－３－２．ケアのための〈血縁〉
１０－３－３．「子どものため」による葛藤
１０－４．子世代の行為と意識
１０－４－１．社会規範の内面化と相対化
１０－４－２．「アイデンティティ」言説による強迫
１０－４－３．新たなカテゴリーの創出と純粋な関係の反転
１１．結論――家族社会学への示唆
１１－１．本稿が構築した分析枠組みの応用可能性
１１－１－１．〈血縁〉の家族社会学へ
１１－１－２．家族の「多様化」「個人化」時代の〈血縁〉
１１－２．本稿の意義
１１－２－１．理論的な示唆
１１－２－２．実践的な示唆
１１－３．今後の課題と展望
引用文献

本文は、
野辺陽子著『養子縁組の社会学――〈日本人〉にとっての〈血縁〉とはなにか』新曜社、2018 年、ISBN 978-4-7885-1558-1
として、2018 年 2 月 15 日に出版済。

出版社との契約により 2036 年 6 月 30 日まで全文公表は出来ない。

引用文献

秋風千惠，2013『軽度障害の社会学――「異化＆統合」をめざして』ハーベスト社.

Allan, Graham, Hawker, Sheila & Crow, Graham, 2001, Family Diversity and Change in Britain and Western Europe, *Journal of Family Issues*, vol. 22 no. 7, 819-37.

Allan, Graham and Crow, Graham, 2001, *Families, Households, and Society*, Palgrave MacMillan.

Ambert, Anne-Marie, 1994, An International Perspective on Parenting: Social Change and Social Construct, *Jounal of Marrige and the Family*, 56: 529-43.

網野武博，2001，「里親」『世界の児童と母性』50，50-1.

安藤藍，2010，「里親経験の意味づけ――子どもの問題行動・子育ての悩みへの対処を通じて」『家族研究年報』35: 43-60.

青山道夫，1951，「養子制度の新動向――家族生活と法律」『法律のひろば』4(9): 8-12.

青山道夫・竹田旦・有地亨・江守五夫・松原治郎編，1974，『講座 家族６ 家族・親族・同族』弘文堂.

有地亨，1993，「出生率の低下・生殖革命・特別養子」『家族は変わったか』有斐閣，203-23.

有田啓子，2006a，「迫られる「親」の再定義――法的認知を求めるアメリカの lesbian-mother が示唆するもの」『コア・エシックス』2: 17-29.

――――，2006b，「Lesbian-mother の子育ては健全か――発達心理学分野の実証研究とそれをめぐる議論」『Core ethics』2: 209-23.

――――，2007，「スティグマ化された家族の多様性の「発見」――英語圏の発達心理分野における Lesbian-family 比較研究の検討」『Core ethics』3: 13-26.

浅井美智子，1995，「生殖技術による家族の選択は可能か」浅井美智子・柘植あずみ編『つくられる生殖神話――生殖技術・家族・生命』サイエンスハウス，92-123.

――――，1996，「生殖技術と家族」江原由美子編『生殖技術とジェンダー』勁草書房，255-84.

――――，2000，「生殖技術とゆれる親子の絆」藤崎宏子編『親と子――交錯するライフコース』ミネルヴァ書房，59-82.

Bartholet, Elizabeth, 1999, *Family Bonds: Adoption, Infertility, and the New World of Child Production*, Beacon Press.

Beck-Gernsheim, Elisabeth, 1989, *Die Kinderfrage：Frauen zwischen Kinderwunsch und Unabhängigkeit*,（＝1995，木村育世訳『子どもをもつという選択』勁草書房.

Berger, Peter, 1967, *The Sacred Canopy: Elements of a Sociological Theory of Religion*, Doubleday & Company（＝1979，薗田稔訳『聖なる天蓋――神聖世界の社会学』新曜社）.

Berger, Peter & Luckmann, Thomas, 1966, *The social construction of reality: a treatise in the sociology of knowledge*（＝2003，山口節郎訳『現実の社会的構成――知識社会

学論考』新曜社.

Berger, Peter L.,Kellner, Hansfried, 1981, *Sociology reinterpreted：an essay on method and vocation*, Anchor Press/Doubleday（＝1987,『社会学再考――方法としての解釈』新曜社.

Braithwaitea, Dawn, Olson, Loreen, Golishc, Tamara, Soukupd, Charles & Turman, Paul, 2001, "Becoming a family": developmental processes represented in blended family discourse, *Journal of Applied Communication Research*, Volume 29, Issue 3, 221-47.

Brodwin, Paul, 2002, Genetics, Identity, and the Anthropology of Essentialism, *Anthropological Quarterly*, Vol. 75 Issue 2, 323-30.

Brodzinsky David and Schechter Marshall and Henig Robin, 1992, *Being Adopted: The Lifelong Search for Self*. Anchor.

Brodzinsky, David, Daniel Smith and Anne Brodzinsky, 1998, *Children's Adjustment to Adoption: Developmental and Clinical Issues*, SAGE.

Carp, Wayne, 2002，" Adoption, Blood kinship, Stigma, and the Adoption Reform Movement: A Historical Perspective"，*Law & Society Review*, 36(2): 433-59.

Carsten, Janet, 2000a, Carsten, Janet ed. *Cultures of relatedness: new approaches to the study of kinship*, Cambridge University Press.

――――, 2000b, 'Knowing where you've come from': Ruptures and continuities of time and kinship in narratives of adoption reunions, *Journal of the Royal Anthropological Institute*, 6(4): 687-703.

Cheal, David, 2008, *Families in Today's World: A Comparative Approach*, Routledge.

Chodorow, Nancy, 1978, *The reproduction of mothering: psychoanalysis and the sociology of gender*, University of California Press（＝1981，大塚光子・大内菅子訳『母親業の再生産――性差別の心理・社会的基盤』新曜社.

出口顕，1999,『誕生のジェネオロジ――人工生殖と自然らしさ』世界思想社.

江原由美子，1988,『フェミニズムと権力作用』勁草書房.

――――，2009,「制度としての母性」天野正子・伊藤公雄・伊藤るり・井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編 『新版日本のフェミニズム 5 母性』岩波書店，2-37.

江原由美子編，1996,『生殖技術とジェンダー』勁草書房.

江原由美子・長沖暁子・市野川容孝，2000,『女性の視点からみた先端生殖技術』東京女性財団.

江守五夫，1974,「原始血縁共同体の親族構造」青山道夫・竹田旦・有地亨・江守五夫・松原治郎編『講座 家族 6 家族・親族・同族』弘文堂，1-39.

Edwards, Rosalind, Gillies Val & McCarthy Jane Ribbens, 1999, BIOLOGICAL

PARENTS AND SOCIAL FAMILIES: Legal discourses and everyday understandings of the position of step-parents, *International Journal of Law, Policy and the Family* 13(1): 78-105.

Festinger, Leon, 1957, *A Theory of congnitive dissonance*（＝1965、『認知的不協和の理論・社会心理学序説』誠信書房。

Fineman, Martha, 1995, *The Neutered Mother, The Sexual Family, and Other Twentieth Century Tragedies*, Routledge（＝2003,　上野千鶴子監訳『家族、積みすぎた方舟――ポスト平等主義のフェミニズム法理論』学陽書房.

――――, 2004, *The autonomy myth: a theory of dependency*, The New Press（＝2009, 穐田信子・速水葉子訳『ケアの絆――自律神話を超えて』岩波書店.

Finkler, Kaja, 2000, *Experiencing the New Genetics: Family and Kinship on the Medical Frontier*,　Univ of Pennsylvania Pr.

フィンレージの会，2000,『新・レポート不妊――不妊治療の実態と生殖技術についての意識調査報告』.

Fisanick , Christina, 2009, *Issues in Adoption (Current Controversies)*, Greenhaven Pr.

Freeark K, Rosenberg EB, Bornstein J, Jozefowicz-Simbeni D, Linkevich M, Lohnes K., 2005, Gender differences and dynamics shaping the adoption life cycle: review of the literature and recommendations.*American Journal of Orthopsychiatry*. 75(1):86-101.

飯塚理八・林方也，1970,「人工授精」小林隆監修『現代産科婦人科学大系　9《不妊症　避妊》』中山書店，227-51.

星野信也，1986,「養子制度改正試案への提言――イギリスの養子制度の動向」『月刊福祉』６月号，76-85.

藤井勝，1997,『家と同族の歴史社会学』刀水書房.

藤原信行，2007,「近親者の自殺、意味秩序の再構築、動機の語彙」『Core Ethics』3: 301-13.

藤原里左、2006,『重度障害児家族の生活――ケアする母親とジェンダー』明石書店.

Gabb, Jacqui, 2008, *Researching Intimacy in Families*, Palgrave Macmillan.

Giddens, Anthony, 1991, *Modernity and self-identity: self and society in the late modern age*, Blackwell Publishing（＝2005，秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ――後期近代における自己と社会』ハーベスト社.

――――, 1992, *The transformation of intimacy: sexuality, love and eroticism in modern societies*, Polity Press（＝1995，松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容――近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』而立書房.

Goffman, Erving, 1963, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Prentice-Hall, Inc.（＝1980、石黒毅訳『スティグマの社会学――烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房）

Grotevant, Harold, Nora Dunber, Julie Kohler and Amy Esau, 2007, “Adoptive Identity,” Rafael, Javier et al, *Handbook of Adoption: Implications for Researchers, Practitioners, and Families*, SAGE, 77-89.

原田綾子，2008,「養子縁組のオープンネス――アメリカにおける『オープンな養子縁組』を中心に」『民商法雑誌』138(4・5): 547-68.

橋本真琴，2000,「価値剥奪装置としての差別――『婚外子差別』を手がかりにして」『ソシオロゴス』26: 121-40.

服部篤美，1991,「日本――体外受精・胚移植」『比較法研究』(53): 84-93.

Hayden, Corinne, 1995, Gender, Genetics, and Generation: Reformulating Biology in Lesbian Kinship, *Cultural Anthropology*, Vol. 10, No. 1, 41-63.

Hayes, Peter, & Habu, Toshie, 2006, *Adoption in Japan: comparing policies for children in need*, Routledge（＝2011，土生としえ訳・津崎哲雄監訳,『日本の養子縁組――社会的養護施策の位置づけと展望』明石書店.

平井晶子，2009,「変容する直系家族――東北日本とピレネーの場合」落合恵美子・小島宏・八木透編『歴史人口学と比較家族史』早稲田大学出版部，108-29.

広井多鶴子，2002,「<家族>の範囲（前）――明治前期の家族と親族」『高崎健康福祉大学紀要』1: 85-100.

久留都茂子，1960,「虚偽の出生届と養子縁組」家族法大系刊行委員会編『家族法大系Ⅳ（親子）』有斐閣，217-30.

久冨善之，1990,「里親と里子」『<教育>――誕生と終焉』藤原書店，187-92.

本田和子，2007,『子どもが忌避される時代――なぜ子どもは生まれにくくなったのか』新曜社.

Hoops, Janet, 1990, “Adoption and Identity Formation”, Brodzinsky David and Marshall Schechter eds., *The Psychology of Adoption*, Oxford University Press,144-166.

細川清，1987,「養子法の改正」『ジュリスト』894: 44-53.

船橋惠子，2006,『育児のジェンダー・ポリティクス』勁草書房.

家永登，2004,「生殖革命と親子関係」清水浩昭・森謙二・岩上真珠・山田昌弘編『家族革命』弘文堂，221-9.

飯塚理八・林方也，1970,「AID の社会的側面」『現代産科婦人科体系９』，248-50.

井上真理子，2004,「『生殖補助医療』における親子関係」井上真理子編『現代家族のアジェンダ――親子関係を考える』世界思想社，91-119.

井上俊，1997,「動機と物語」『現代社会学　1　現代社会の社会学』岩波書店，19-46.

石川准，1992,『アイデンティティ・ゲーム――存在証明の社会学』新評論.

石川稔，1987,「親子法における血縁と養育――親子法の課題」『ジュリスト』875: 78-84.

伊藤幹治，1982,『家族国家観の人類学』ミネルヴァ書房.

伊藤智樹，2009,『セルフヘルプ・グループの自己物語論――アルコホリズムと死別体験を例に』ハーベスト社.
岩本通弥，2001,「『家』族の過去・現在・未来――生殖革命時代のオヤコ」日本民俗学会第 53 回年回研究発表要旨.
――――，2002,「イエ」小松和彦・関一敏編『新しい民俗学へ――野の学問のためのレッスン 26』せりか書房，155-67.
――――，2006,「民俗学からみた新生殖技術とオヤコ――『家』族と血縁重視という言説をめぐって」太田素子・森謙二編 『〈いのち〉と家族――生殖技術と家族 Ⅰ』早稲田大学出版，75-104.
岩崎美枝子，1984,「里親開拓運動からみた養子制度」『新しい家族』4 号，56-72.
岩崎美枝子，1997,「特別養子法の改正は必要か――特別養子成立家庭のアンケート調査報告をかねて」『新しい家族』30: 31-48.
――――，2001,「児童福祉としての養子制度――家庭養護促進協会からみた斡旋問題の実情」養子と里親を考える会編『養子と里親――日本・外国の未成年養子制度と斡旋問題』日本加除出版，57-79.
――――，2004,『真実告知事例集 うちあける（改訂版）』（社）家庭養護促進協会.
――――, 2009,「2008 年里親制度改正と民間機関の役割および養子縁組里親の諸問題」『新しい家族』52: 123-38.
和泉広恵，2003,「子育て規範と親子関係」土屋葉編『これからの家族関係学』角川書店、135-58.
――――，2006,『里親とは何か――家族する時代の社会学』勁草書房.
門野里栄子，2006,「生殖技術の受容と〈近代家族〉の構成要素」『甲南女子大学研究紀要 人間科学編』42: 53-62.
Kadushin, Alfred and Martin, Judith, 1988, “Substitute Care: Adoption”, *Child Welfare Services*, Macmillan Publishing Company, 533-668
梶井祥子，2006,「家族意識の変容過程――親の離婚を経験した子どもの事例調査から」『北海道武蔵女子短期大学紀要』38: 39-60.
柏木惠子，2001,『子どもという価値――少子化時代の女性の心理』中公新書.
――――，2003,『家族心理学――社会変動・発達・ジェンダーの視点』東京大学出版会.
家庭養護促進協会編，2000,『あたらしいふれあい第３編 親子になろう！』晃洋書房.
家庭養護促進協会，2004,『ルーツを探る』家庭養護促進協会大阪事務所.
――――，2007,『真実告知ハンドブック――里親・養親が子どもに話すために』家庭養護促進協会.
家庭養護促進協会大阪事務所，1998,『養親希望者に対する意識調査――「養子を育てたい人のための講座」受講者へのアンケート調査報告』.
加藤一郎，1983,「養子制度の改正問題と外国法」『ジュリスト』782: 14-5.

加藤伊都子，2012,「DV の基礎知識――相談を受けるために」神原文子・しんぐるまざーずふぉーらむ関西編『ひとり親家庭を支援するために――その現実から支援策を学ぶ』大阪大学出版会，167-97.

加藤秀一，2007,「遺伝子決定論、あるいは〈運命愛〉の両義性について――言説としての遺伝子/DNA」柘植あづみ・加藤秀一編『遺伝子技術の社会学』文化書房博文社.

河合利光，2012,「家族・親族研究の復活の背景」河合利光編『家族と生命継承――文化人類学的研究の現在』時潮社，15-44.

川島武宜，1983[1957],「イデオロギーとしての家族制度」『川島武宜著作集 第 10 巻 家族および家族法』岩波書店.

――――，1983,『川島武宜著作集 第十巻 家族および家族法』岩波書店.

貴田（左高）美鈴，2007,「里親制度における政策主体の意図――1960 年代から 1980 年代の社会福祉の政策展開に着目して」『名古屋市立大学 人間文化研究』8: 83-97.

菊田昇，1978,「実子特例法の提唱と嬰児殺の防止――中谷教授の論文に反論する」『ジュリスト』678: 130-8.

菊地博，1986,「特別養子制度の試案、離婚制度等研究会の提案について」『判例タイムズ』577: 2-6.

菊地緑，1997,「里親家庭の子どもたち」平湯真人編『施設でくらす子どもたち』明石書店，127-70.

――――，2007,「日本で里親制度が利用されない理由とは？――国際比較研究を通して言えること」『子どもの虐待とネグレクト』9(2): 147-155.

菊田昇，1978,「実子特例法の提唱と嬰児殺の防止――中谷教授の論文に反論する」『ジュリスト』678: 130-8.

――――，1979,「血縁と子供の幸福」『法学セミナー増刊』10: 34-5.

金城清子，1997,「生殖技術と家族」『時の法令』1559: 58-73.

木下栄二，1996,「親子関係研究の展開と課題」野々山久也・袖井孝子・篠崎正美編『いま家族に何が起こっているのか』ミネルヴァ書房，136-58.

桐野由美子，1998,「意識調査を通してみた日本の子どものための養子縁組――その１：当事者と非当事者の比較」『関西学院大学社会学部紀要』81: 129-41.

Kirk, David, 1964, *Shared Fate A Theory and Method of Adoptive Relationships*, Ben-Simon Pubns.

絆の会，1997,『家族づくり――縁組家族の手記』世織書房.

小堀哲郎，2005,「養子縁組・生殖医療・ボランタリズム―-里親制度をめぐるいくつかの課題」『秋草学園短期大学紀要』 (22): 37-50.

小松満貴子，2009,「養親・里親の適格と傾向に関する一考察――ジェンダー問題の視点から」『新しい家族』 (52): 139-144.

古澤頼雄，2005,「非血縁家族を構築する人たちについての文化心理学的考察――その人た

ちへの社会的スティグマをめぐって」『東京女子大学比較文化研究所紀要』66: 13-25.
古澤頼雄・富田庸子・鈴木乙史・横田和子・星野寛美，1997,「養子・養親・生みの親関係に関する基礎的研究――開放的養子縁組（Open Adoption）によって子どもを迎えた父母」『安田生命社会事業団研究助成論文集』33: 134-43.
厚生労働省雇用均等・児童家庭局家庭福祉課，2003,『子どもを健やかに養育するために――里親として子どもと生活をするあなたへ』日本児童福祉協会.
Kroger, Jane, 2000, *Identity Development: Adolescence Through Adulthood*, Sage Publications, Inc..（＝2005，榎本博明訳，『アイデンティティの発達――青年期から成人期』北大路書房.
草柳千早，2004,『「曖昧な生きづらさ」と社会――クレイム申し立ての社会学』世界思想社.
栗田博之，1993a,「赤ちゃんはどこから来るの？――人類学史上の『処女懐胎論争』について」須藤健一・杉島敬志編『性の民族誌』人文書院，233-51.
――――，1993b,「親と子の絆」野村雅一・市川雅編『技術としての身体』大修館書店，354-74.
黒須里美・落合恵美子，2002,「人口学的制約と養子――幕末多摩農村における継承戦略」速水融編『近代移行期の家族と歴史』ミネルヴァ書房，127-60.
草柳千早，1996,「『クレイム申し立て』の社会学再考――『問題経験』の社会学に向けて」『現代社会学理論研究』6: 29-42.
――――，2000,「『社会問題』という経験――夫婦の姓をめぐって」好井裕明・桜井厚編『フィールドワークの経験』せりか書房、161-75.
葛野浩昭，2000,「人類学からみた親子関係の多様性」藤崎宏子編『親と子――交錯するライフコース』ミネルヴァ書房，107-31.
李英珠，2001,「通婚規則からみた皇室の『純血性』――近代日本の『家』と『血縁』」日本民俗学 225, 1-34.
Leighton, Kimberly, 2005, Being Adopted and Being a Philosopher: Exploring Identity and the “Desire to Know” Differently, Haslanger Sally and Witt Charlotte edit, *Adoption Matters: Philosophical and Feminist Essey*s Cornell University Press, 146-70.
Leon, Irving, 2002, Adoption losses: Naturally occurring or socially constructed? *Child Development*, 73(2): 652-663.
前田泰，1986,「養子制度の改革に関する中間試案の検討――英米法との比較から」『判例タイムズ』617: 27-35.
March, Karen, 1995, “Perception of adoption as social stigma: Motivation for search and reunion”, *Journal of Marriage and the Family*, 57: 653-60
丸山茂，2003,「『父』という問題構成」孝本貢・丸山茂・山内健治編『父―― 家族概念の

再検討に向けて』早稲田大学出版部，3-22.
松本武子，1977,「わが国の里親制度」松本武子編『里親制度――その実践と展望』相川書房，1-20.
松本三和夫，1998,『科学技術社会学の理論』木鐸社.
May, Carl and Cooper, Andrew, 1995, Personal Identity and Social Change: Some Theoretical Considerations, *Acta Sociologica* Vol. 38, No. 1, 75-85.
南貴子，2010,『人工授精におけるドナーの匿名性廃止と家族――オーストラリア・ビクトリア州の事例を中心に』 風間書房.
三島とみ子，1988,「ヨーロッパの養子とわが国の養子」大竹秀男他編『犠牲された親子――養子』三省堂，249-56.
光吉利之，1986,「異居親子家族における『家』の変容――親家族と『あとつぎ』家族」『社会学雑誌』3: 36-55.
三浦正晴，1983,「我が国における養子縁組の実態」『戸籍』462: 15-36.
宮腰奏子，2009,「社会的養護体制の現状と今後の見直しの方向性について」『新しい家族』52: 2-34.
Modell, Judith, 1994, *Kinship with Strangers: Adoption and Interpretations of Kinship in American Culture*, University of California Press.
森和子，2004,「『親になる』意思決定についての一考察――実子を授からず里親になった夫婦の語りを通して」『家族関係学』 (23): 103-115.
――――，2005,「養親子における『真実告知』に関する一考察――養子は自分の境遇をどのように理解していくのか」『文京学院大学人間学部研究紀要』7(1): 61-88.
――――，2006,「養子の出自を知る権利の保障についての一考察――オーストラリア・ニュージーランドにおける実践から」『文京学院大学人間学部研究紀要』8(1): 21-51.
森岡正博，2001,「生殖技術と近代家族」『家族社会学研究』13(2): 21-9.
両角道代, 2003,「スウェーデンの人工生殖法――非配偶者間人工生殖における『子の福祉』について」『法の支配』131: 87-95
村瀬嘉代子，1992,「発達・臨床心理学からみた血縁の意味」川井健他編『講座・現代家族法 第３巻』日本評論社，363-85.
牟田和恵，2009,「家族のオルタナティブと新たな生の基盤を求めて」牟田和恵編『家族を超える社会学――新たな生の基盤を求めて」新曜社，ｉ-vi.
中川善之助，1972,「養子制度論」『注釈民法 22 のⅡ 親族(3)親子(2)』有斐閣，473-84.
――――，1937,「養子制度論」河出孝雄編『家族制度全集 史論篇第三巻 親子』河出書房，145-77.
中川淳，1987,「特別養子制度の法律案要綱を読んで」『法律のひろば』40(4): 73-80.
――――，1994,「親子法の理念と特別養子制度」『現代家族法の研究』239-64.
中川高男 1976,「実子特例法について」『法の支配』26: 49-71.

————, 1997,「特別養子法の一考察——審議の経過を回顧して」『明治学院大学法律科学研究所年報』13: 1-11.
中川高男他, 1976,「(座談会) 実子特例法について」『法の支配』26: 4-40.
中野佳澄, 2013,「非血縁の人々が家族になる過程——そこからみえる家族の本質とは」島根大学法文学部卒業論文.
中野卓, 1959,「『家』のイデオロギー」⇒光吉利之・松本通晴・正岡寛司編, 1986,『リーディングス 日本の社会学３ 伝統家族』東京大学出版会, 132-44.
Nelkin Drothy and Lindee Susan, 1995 ,*The DNA Mystique: The Gene as a Cultural Icon*（＝1997, 工藤政司訳『DNA 伝説』紀伊国屋書店）
NHK 放送文化研究所, 2010,『現代日本人の意識構造（第７版）』日本放送出版協会.
西原和久, 1998,『意味の社会学——現象学的社会学の冒険』弘文堂.
野辺陽子, 2006,「変容する親子規範——特別養子制度からみる血縁規範のゆくえ」東京大学大学院修士論文.
————, 2009,「養子縁組した子どもの問題経験と対処戦略」『家庭教育研究所紀要』31: 88-97.
————, 2010,「養子という経験を理解する新たな枠組みの構築へ向けて」『新しい家族』53: 34-9
————, 2012a,「なぜ養子縁組は不妊当事者に選択されないのか？——『血縁』と『子育て』に関する意味づけを中心に」『季刊家計経済研究』93: 58-66.
————, 2012b,「不妊と多様な選択」(baby.com (http://www.babycom.gr.jp/pre/funinn/youshi4.html)
野田潤, 2008,「『子どものため』という語りから見た家族の個人化の検討——離婚相談の分析を通じて（1914～2007)」『家族社会学研究』20(2): 48-59.
野口裕二, 2004,「援助実践の社会学——その課題と可能性」『福祉社会学研究』1: 63-76.
乗井弥生, 2012,「親権と養育費、そして面会交流」神原文子・しんぐるまざーずふぉーらむ関西編『ひとり親家庭を支援するために——その現実から支援策を学ぶ』大阪大学出版会, 27-52.
野沢慎司, 2004,「ステップファミリーのストレスとサポート」石原邦雄編『家族のストレスとサポート』放送大学教育振興会, 225-42.
————, 2009「家族下位文化と家族変動——ステップファミリーと社会制度」牟田和恵編『家族を超える社会学——新たな生の基盤を求めて』新曜社、175-201.
野沢慎司・茨木尚子・早野俊明・SAJ 編, 2006,『Q&A ステップファミリーの基礎知識——子連れ再婚家族と支援者のために』明石書店.
沼正男, 1959,「養子法の改正方向——特別養子制度を発端として」『法律のひろば』12(9): 6-9.
落合恵美子, 1989,『近代家族とフェミニズム』勁草書房.

————, 1994,『21 世紀家族へ――家族の戦後体制の見かた・超えかた』有斐閣選書.
小川正恭，2012,「親族論の後退と復活――日本の事情」河合利光編『家族と生命継承――文化人類学的研究の現在』時潮社，45-69.
荻野美穂，2002,『ジェンダー化される身体』勁草書房.
————, 2005,「近代家族と生殖技術」『大阪大学日本学報』(24): 39-47.
小熊英二，1995,『単一民族神話の起源―― 「日本人」の自画像の系譜』新曜社.
岡野八代・加藤秀一，2010,「対論 新しい『親密圏』を求めて」岡野八代編『自由への問い７ 家族――新しい『親密圏』を求めて』岩波書店，2-25.
大日向雅美，2000,『母性愛神話の罠』日本評論社.
————, 2009,「母性概念をめぐる現状とその問題点」天野正子他編『新編日本のフェミニズム 5 母性』岩波書店，41-67.
大森政輔，1983,「法制審議会民法部会身分法小委員会における養子制度の検討について」『民事月報』38(5): 3-38.
大竹秀男・竹田旦・長谷川善計編，1988,『シリーズ家族史２ 擬制された親子――養子』三省堂.
大藤修，1996,『近世農民と家・村・国家――生活史・社会史の視座から』吉川弘文館.
小沢牧子，1986,「母子関係心理学の再検討――母性中心主義との結合をめぐって」『和光大学人文学部紀要』(21): 123-139.
Parkin, David and Stone, Linda, 2004, *Kinship and Family: An Anthropological Reader*, Wiley-Blackwell.
Ragone, Helena, 1994→2004, Surrogate Motherhood and American Kinship, Parkin, David and Stone, Linda, *Kinship and Family: An Anthropological Reader*, Wiley-Blackwell, 342-61.
樂木章子、2004、「養子縁組――血縁なき親子関係をつくる」『現代のエスプリ』441: 147-54.
————、2006、「家族：血縁なき『血縁関係』」杉万俊夫編『コミュニティのグループ・ダイナミックス』京都大学学術出版会、239-70.
————, 2010,「『養親―養子』家族における『産みの母』の位置――核家族への示唆」『集団力学』27: 1-16.
Roseneil, Sasha & Budgeon, Shelley, 2004, Cultures of Intimacy and Care beyond 'the Family': Personal Life and Social Change in the Early 21st Century, *Current Sociology*, 52(2): 135-59.
Rothman, Barbara, 1989, *RECREATING MOTHERHOOD: Ideology and Technology in a Patriarcheal Society*, Carol Mann Agency（＝1996，広瀬洋子訳『母性をつくりなおす』勁草書房）.
最高裁判所，2009,「平成 21 年 司法統計 家事事件編」裁判所ホームページ，（2011 年 6 月 2 日取得，http://www.courts.go.jp/sihotokei/nenpo/pdf/B21DKAJ02.pdf）.

才村眞理編，2008,『生殖補助医療で生まれた子どもの出自を知る権利』福村出版.
斉藤安弘，1973,「家族福祉の研究――主として里親制度を通して」山下俊郎古稀記念論文編纂会『子ども――その発達・保育と福祉』玉川大学出版部，379-94.
斎藤真緒，2000,「親性の『個人化』――家族の分析視角としての『個人化』論の可能性」立命館産業社会論集 36(3): 49-70.
――――，2006,「今日における子どもをもつ意味変容――イギリスにおける Parenting Education の台頭」『立命館人間科学研究』11: 125-35.
齋藤純一，2003,「まえがき」齋藤純一編『親密圏のポリティクス』ナカニシヤ出版，ⅰ-ⅷ.
斎藤嘉孝，2009,「不妊の対応策としての養子縁組・里親制度の可能性――斡旋事業および人びとの意識をめぐる検討」『西武文理大学研究紀要』14: 35-41.
坂本佳鶴恵, 1990,「長男扶養に関わる 2 つの規範――『家』意識の意味」『社会老年学』(32): 74-82.
櫻井奈津子，2003,「里親制度推進にあたっての課題――東京都養育家庭制度における実践から」『世界の児童と母性』54: 22-25.
桜井厚，2005,「調査研究のテーマは、どのように決まるか」「桜井厚・小林多寿子編『ライフストーリー・インタビュー――質的研究入門』せりか書房，12-7.
佐藤岩夫，2004,「歴史から法を読み解く――歴史法社会学」和田仁孝・太田勝造・阿部昌樹編『法と社会へのアプローチ』日本評論社，146-68.
佐藤郁哉，2008,『質的データ分析法――原理・方法・実践』新曜社.
Schneider, David, 1968, *American kinship: a cultural account*, Prentice-Hall.
――――, 1984, *A critique of the study of kinship*, University of Michigan Press.
盛山和夫，1993,「『核家族化』の日本的意味」直井優・盛山和夫・間々田孝夫編『日本社会の新潮流』東京大学出版，3-28.
――――，1995,『制度論の構図』創文社.
仙波由加里, 2005,「特定不妊治療費助成事業の現状と課題」『F-GENS ジャーナル』4: 85-92.
清水昭俊，1989,「『血』の神秘――親子のきずなを考える」田辺繁治編『人類学的認識の冒険――イデオロギーとプラクティス』同文館，45-68.
新明正道, 1937,「血縁論」河出孝雄編『家族制度全集 史論篇第三巻 親子』河出書房, 1-17.
白井千晶，2004,「男性不妊の歴史と文化」村岡潔他『不妊と男性』青弓社，151-92.
――――，2011,「不妊当事者の経験と意識に関する調査 2010」報告書（http://homepage2.nifty.com/~shirai/survey03/2010report.pdf、2013.02.18）.
――――，2013,「不妊女性がもつ非血縁的親子に対する選好について－親族的選択原理を手がかりに」『社会学年誌』54: 69-84.
白井泰子，1991,「日本（1）・人工生殖に対する社会的態度」『比較法研究』53，61-74.
Shorter, Edward, 1975, *The Making of the Modern Family* Basic Books（＝1987，田中俊

宏他訳,『近代家族の形成』昭和社).
副田義也, 1986,「子どものための福祉政策」『世界の子どもの歴史 11』第一法規出版, 230-47.
相馬直子，2013,「子育て支援と家族政策――家族主義的福祉レジームのゆくえ」庄司洋子編『親密性の福祉社会学――ケアが織りなす関係』東京大学出版会，43-67.
Stone, Linda, 2004, Introduction, Parkin, David and Stone, Linda, *Kinship and Family: An Anthropological Reader*, Wiley-Blackwell, 331-41.
Strathern, Marilyn, 1992, *After Nature: English Kinship in the Late Twentieth Century*, Cambridge University Press.
杉岡直人，1990,『農村地域社会と家族の変動』ミネルヴァ書房.
庄司洋子，1986,「現代の児童問題の特質と児童相談所・施設の役割」『月刊福祉』69(16): 42-50.
――――，1998,「家族・児童福祉の視座」庄司洋子・松原康雄・山縣文治編『家族・児童福祉』有斐閣，13-34.
庄司順一・益田早苗，2001,「日本の里親制度の現状と課題」養子と里親を考える会編『養子と里親――日本・外国の未成年養子制度と斡旋問題』日本加除出版，81-101.
庄司順一・益田早苗・谷口和加子・安藤朗子他，1999,『里親の意識および養育の現状について』日本子ども家庭総合研究所.
庄司順一，2003,『フォスターケア』明石書店.
鈴木博人，2001,「日本の養子縁組斡旋をめぐる問題」養子と里親を考える会編『養子と里親――日本・外国の未成年養子制度と斡旋問題――』日本加除出版株式会社，33-56.
田渕六郎，1998,「『家族』へのレトリカル・アプローチ――探索的研究」『家族研究年報』(23): 71-83.
高田洋子，2000,「未成年子の親子関係研究のレビューと課題――実証研究を中心に」神原文子・高田洋子編『家族社会学研究④教育期の子育てと親子関係――親と子の関わりと新たな観点から実証する』ミネルヴァ書房，3-25.
高梨公之，1982,「親子の意味とその構成――人工受精子、体外受精子、完全養子について」『秋田法学』第 2 巻第 1 号，5-32.
竹井恵美子, 1999,「血縁家族という幻想――養子里親の経験から」『女性学年報』20: 77-87.
竹内みちる・樂木章子，2006,「養子の暗いイメージは、いかにして形成されたのか――その歴史的考察」『集団力学』23，81-9.
竹内みちる・樂木章子・杉万俊夫，2010,「産むことと育てることを分離する社会規範の可能性――NPO 法人『環の会』の事例から」『集団力学』27: 62-75.
田間泰子，1985,「つくられた母性愛神話――近代西洋医学と精神分析」『女性学年報』6, 16-25.
――――，2001,『母性愛という制度』勁草書房.
――――，2006,『「近代家族」とボディ・ポリティクス』世界思想社.

田中理恵，1998,「養護施設における子どものスティグマに関する研究」『教育社会学研究』63: 199-217.
樽川典子，1994,「里親たちの親子関係序論――親子関係の解釈装置」『社会学ジャーナル』19: 133-44.
鑪幹八郎他編，1995,『アイデンティティ研究の展望Ⅱ』ナカニシヤ出版.
戸田貞三，1970,『新版 家族構成』新泉社.
床谷文雄，1986,「養子制度の改正に関する中間試案の問題点」『判例タイムズ』583: 20-5.
椿寿夫，1996,「実親子関係と DNA 鑑定――序説」『ジュリスト』1099: 29-35.
坪内玲子，1992,『日本の家族――『家』の連続と不連続』アカデミア出版会.
――――，2001,『継承の人口社会学――誰が『家』を継いだか』ミネルヴァ書房.
土屋敦，2012,「敗戦後日本の浮浪児、孤児・捨児をめぐる施設保護問題――社会的養護児童に対する逸脱規範と『家庭』概念の系譜」東京大学大学院博士論文.
土屋文昭，1986,「『養子制度の改正に関する中間試案』に対する各界意見の概要」『戸籍』510: 14-35.
――――，1987a,「『民法等の一部を改正する法律』の概要」『法律のひろば』40(12): 4-10.
――――，1987b,「養子法の改正について」『判例タイムズ』38(29): 4-26.
柘植あづみ，1995,「生殖技術に関する受容と拒否のディスクール」浅井美智子・柘植あずみ編『つくられる生殖神話――生殖技術・家族・生命』サイエンスハウス，56-89.
――――，1996,「『不妊治療』をめぐるフェミニズムの言説再考」江原由美子編『生殖技術とジェンダー』勁草書房，219-53.
――――，1999,「文化としての生殖技術――不妊治療にたずさわる医師の語り』松籟社.
――――，2005,「生殖補助医療に関する議論から見る『日本』」上杉富之編『現代生殖医療――社会科学からのアプローチ』世界思想社，138-58.
――――, 2012,『生殖技術――不妊治療と再生医療は社会に何をもたらすか』みすず書房.
宇田川妙子，2012,「ジェンダーと親族――女性と家内領域を中心に」河合利光編『家族と生命継承――文化人類学的研究の現在』時潮社，149-77.
上野千鶴子，1994,「ファミリィ・アイデンティティのゆくえ」『近代家族の成立と終焉』岩波書店，3-42.
――――，2002,『差異の政治学』岩波書店.
上野千鶴子編，2001,『構築主義とは何か』勁草書房.
――――，2005,『脱アイデンティティ』勁草書房.
上野和男，1988,「東アジアにおける養子の比較研究」大竹秀男・竹田旦・長谷川善計編『犠牲された親子―養子』三省堂，181-205.
上杉富之，2002,「新生殖技術時代の人類学――親族研究の転換と新たな展開」『民族學研究』66(4), 389-413.
――――，2012,「複数化する親子と家族――ポスト生殖革命時代の親子・家族関係の再構

築」河合利光編『家族と生命継承――文化人類学的研究の現在』時潮社，207-25.
van Balen, Frank, Verdurmen, Jacqueline, & Ketting, Evert, 1997, Choices and motivations of infertile couples, *Patient Education and Counseling*, Volume 31, Issue 1, 19–27
我妻栄，1959b，「養子二題」『ジュリスト』185: 22-3.
我妻栄他，1959a，「＜座談会第 2 回＞親族法の改正――法制審議会民法部会小委員会における仮決定及び留保事項（その 2）に関連して」『法律時報』31(11): 65-78.
――――，1959b，「親族法改正の問題点（下）」『ジュリスト』186: 2-19.
渡辺秀樹，1995，「現代家族、多様化と画一化の錯綜」山岸健編『家族／看護／医療の社会学――人生を旅する人びと』サンワコーポレーション，47-66.
――――，1999「戦後日本の親子関係――養育期の親子関係の質の変遷」『講座社会学２ 家族』東京大学出版会，89-117.
――――，2000，「発達社会学から見た親子関係」藤崎宏子編『親と子――交錯するライフコース』ミネルヴァ書房，42-58.
環の会，2008，『環の会が提唱している「テリング」に関する検討と提言』独立行政法人福祉医療機構助成事業報告書.
Wegar, Katarina, 1997, *Adoption, Identity, and Kinship: The Debate over Sealed Birth Records*, Yale University Press.
――――，2000, Adoption, Family Ideology, and Social Stigma: Bias in Community Attitudes, Adoption Research, and Practice, *Family Relations*, 49(4): 363-70.
Witt, Charlotte, 2005, Family Resemblaces: Adoption, Personal Identity, and Genetic Essentialism, Haslanger, Sally, and Witt, Charlotte ed. *Adoption Matters: Philosophical and Feminist Essays*, Cornell University Press.
山田昌弘，1994，『近代家族のゆくえ――家族と愛情のパラドックス』新曜社.
――――，1999a，「現代社会における子育ての『意味』の危機」『家族社会学研究』11: 49-57.
――――，1999b，『家族のリストラクチュアリング――21 世紀の夫婦・親子はどう生き残るか』新曜社.
山口亮子，1999，「面接交渉権と子どもの利益――日米の比較」『上智法学論集』42(3・4): 299-327.
山根真理，1999，「親子関係研究の展開と課題」野々山久也・渡辺秀樹編『家族社会学入門――家族研究の理論と技法』文化書房博文社，226-54.
安田裕子，2005，「子どもをもつ 産み育てるということ――不妊治療経験のある女性の語りから」『女性ライフサイクル研究』 (15): 32-41.
――――，2007，「精子・卵子・胚の提供による生殖補助医療で親子関係を築く人々への支援――子どもへの告知に焦点をあてて」『家族教育研究所紀要』29: 57-66
横田和子，2001，「産みの親から育ての親へ，いのちと願いを引き継いで――特別養子縁組

の取り組みから」『月刊福祉』2 月号，42-4.
横山美栄子・難波貴美子，1992,「日本の家族と生殖技術」お茶の水女子大学生命倫理研究会『不妊とゆれる女たち』学陽書房，225-47.
與那覇潤，2006,「穂積八束と消えた「家属」――「誤った」日本社会の自画像をめぐって」『比較日本文化研究』（10): 89-112.
米倉明，1984b,「日本の養子・里親問題――その現状と問題」『新しい家族』5: 26-31.
米村千代，1999,「『家』の存続戦略――歴史社会学的考察』勁草書房.
米沢普子, 1986,「養子縁組サービス――ケースワークの重要性」『新しい家族』8 号, 34-6.
吉田民人編，1978,『社会学――社会科学への招待』日本評論社.
善積京子，2003,「スウェーデンにおける婚外子と父」孝本貢・丸山茂・山内健治編『父――家族概念の再検討に向けて』早稲田大学出版部，158-82.
――――，2012,「スウェーデンの養育訴訟――『子どもの最善の利益』をめぐる父母の攻防」『ソシオロジ』57(1), 3-20.
――――，2013,『離別と共同養育――スウェーデンの養育訴訟にみる「子どもの最善」』世界思想社.
Young, Jock, 1999, *The exclusive society: social exclusion, crime and difference in late modernity*, SAGE Publications（＝2007，青木秀男・伊藤泰郎・岸政彦・村澤真保呂訳『排除型社会――後期近代における犯罪・雇用・差異』 洛北出版.
――――, 2007, *The vertigo of late modernity*, Sage（＝2008，木下ちがや・中村好孝・丸山真央訳『後期近代の眩暈――排除から過剰包摂へ』青土社.
養子と里親を考える会編, 2001,『養子と里親――日本･外国の未成年養子制度と斡旋問題』日本加除出版.
湯沢雍彦，2001a,「まえがき」『養子と里親――日本・外国の未成年養子制度と斡旋問題』日本加除出版，1-6.
――――，2001b,「養子制度の概要と日本の実情」『養子と里親――日本・外国の未成年養子制度と斡旋問題』日本加除出版，1-31.
湯沢雍彦他，2005,『要保護児童支援のための国際国内養子縁組斡旋事業の調査研究』こども未来財団.

【統計・調査】
『法務年鑑』各年度
『福祉行政報告』各年度
『家裁月報』各年度
『司法統計年報』各年度

厚生労働省，2003,「生殖補助医療技術についての意識調査 2003」

————, 2003,「精子・卵子・胚の提供等による生殖補助医療制度の整備に関する報告書」
————, 2005,「平成 18 年度「婚姻に関する統計」の概況」
————, 2011,「平成 23 年度 福祉行政報告例」
厚生労働省雇用均等・児童家庭局, 2009,『児童養護施設入所児童等調査結果の概要』
厚生労働省「出産動向基本調査」
内閣府, 2009,「男女共同参画社会に関する世論調査（平成 21 年 10 月調査）」
社会保障・人口問題研究所, 2013,「人口統計資料集(2013)嫡出でない子の出生数および割合：1925～2011 年」
————, 2013,「人口統計資料集(2013)有配偶女性の年齢（5 歳階級）別出生率：1930～2010 年」
総務省, 2005,「平成 17 年国勢調査　最終報告書「日本の人口」上巻－解説・資料編」
統計数理研究所, 2008,「国民性の研究」

【議事録等】

第 103 回参議院法務委員会（1985 年 11 月 26 日）
衆議院法務委員会（1987 年 08 月 25 日）
法制審議会民法部会第 21 回会議（1985 年 10 月 29 日）
参議院法務委員会（1987 年 09 月 03 日）

論文の内容の要旨

本研究は、「子どものため」に血縁を重視する近年の社会動向を批判的に捉える視座を獲得し、家族社会学に新たな課題を提起するために書かれたものである。具体的には、現代日本の「子どものため」の養子縁組を対象に、血縁が浮上する社会的文脈、関与する利害関係者、当事者の行為と意識への影響について経験的に分析し、現在、非血縁親子全体に生じている状況や自明視されている諸原則を再考するのみならず、血縁を分析する既存の概念や枠組みを刷新することを目指すものである。

１章では、本研究が解くべき問いについて論じた。１節では、非血縁親子（養子縁組、里親、生殖補助医療、ステップファミリー等）に関する国内外の事例から、「子どものため」に血縁が重視される近年の社会動向を示した。２節では、このような動きについての先行研究を批判的に検討し、血縁を「後期近代化」「医療化」という社会変動で説明する分析、あるいは「血縁主義」「実子主義」「遺伝子本質主義」という説明項を用いて説明しようとする分析には限界があることを示した。その上で３節では、文化人類学の知見を取り込み、血縁を被説明項として用いる本研究の立場を示した。４節で①血縁はどの制度内で扱われるのか、②血縁は他のどの知・言説と結びつくのか、③血縁は関係性や自己の構築にどのように関わるのか、という血縁を被説明項として扱うことを目指す本研究の分析枠組みを提示した。５節では、本研究が「子どものため」の養子縁組を事例として分析すること、本研究で用いる〈血縁〉という概念が、ものごとを理解可能なものにするために当事者および研究者が用いる解釈図式および解釈資源のことであり、従来の生殖を意味する実体としての血縁とは独立したものであることを説明した。

２章では、養子縁組に関する先行研究を批判的に検討し、先行研究の問題点を乗り越える本研究の分析視点を明示した。１節では養子縁組と〈血縁〉をめぐる問題点として、①水準／指標／基準の混乱、②行為と意識を等値する解釈図式、③血縁の擬制の解釈、④実親子関係の等閑視を抽出し、２節では養子縁組と「子どものため」をめぐる問題点として、①血縁モデルと養育モデルの区分、②客体＝援助対象としての養親子を抽出した。これら先行研究の問題点を乗り越えるため、３節では、本研究は当事者の「一次理論」（盛山 1995）の解明に焦点をおく意味学派（吉田 1978）のアプローチを採用すること、具体的な分析視点としては、①差異化の実践という視点、②選好と制約の区別、③親の視点と子どもの視点の区別、④定位家族と生殖家族の関連、の４点を提示した。

３章では、本研究が採用した対象と方法について論じた。本研究では分析対象として制度と当事者の２つの水準を設定した。１節では、制度については法律と運用を扱うこと、具体的には特別養子制度の立法過程と隣接領域（里親制度・不妊治療）との異同を扱うこと、分析する対象としては法制審議会資料や国会会議録などの文書資料や養子縁組あっせん団体のホームページなどを用いることを説明した。２節では、当事者については養親（候補者）および養子に行ったインタビュー調査の概要とデータの収集方法や分析手法（コー

ドマトリックス）について説明を行った。

４章では、特別養子制度の立法過程のレトリック分析を行った。１節で立法の背景と制約条件を解説し、２節では、立法をめぐる議論の中で、特に①戸籍の記載、②実親子関係の法的断絶、③離縁、④家庭環境の４つの論点について、「子どものため」引用された専門家言説とレトリックを分析した。３節では分析の結果として、立法の議論では、養子／実子の境界が揺らいでいたこと、「親子関係は血縁がなくても法律によって作れる」が、「子どものアイデンティティ確立にとって出自は必要」という認識枠組みが形成されたこと、立法を正当化する根拠として心理学的な専門家言説が重要な役割を果たしたことなどを論じた。

５章では、養子制度の運用過程の分析を行った。具体的には特別養子制度だけではなく、里親制度、不妊治療という隣接領域も比較対象として取り上げた。１節では、各領域間の関係を概説し、２節では、①各領域に現れる親子観、②その親子観の背景、③運用の場面で実際に課せられている条件等について分析を行った。その結果、３節では、「子どものため」／親子関係／〈血縁〉の関連には制度ごとにバリエーションがあること、各制度の差異化と正当化のプロセスで「子どものため」という言説がより一層浮上することなどを論じた。

６章では、親子形成過程でどのように血縁が浮上するのかを分析するために、41 ケースを対象に、不妊当事者がいかにして養子縁組を選択するのか／選択しないのかについて、最終的な選択肢（不妊治療、子どものいない人生、養子縁組、里親）に至るまでのプロセスを比較分析した。１節でケース概要と６章の分析視点を解説した。２節で養子縁組を選択したケースと夫婦間の不妊治療・子どものいない人生を選択したケースの比較、３節で養子縁組を選択したケースと第三者の関わる不妊治療を選択したケースの比較、４節で養子縁組を選択したケースと里親を選択したケースの比較を行なった。５節ではこれらを考察し、従来用いられてきた枠組みである「養子縁組を選択する＝子育てを重視する」「養子縁組を選択しない＝血縁を重視する」という枠組みが必ずしも当てはまらないこと、「子どものため」に養子縁組しないというロジックが存在すること、当事者がその時の状況に合わせて養子を「実子と同じ」あるいは「実子とは異なる」と意味づけていることを示した。

７章では、養子縁組後の親子関係でどのように血縁が浮上するのかを親の視点から分析するために、養親となった 18 ケースを対象とし、親子関係の局面ごとに分析を行った。１節でケース概要と７章の分析視点を解説した。２節では親子関係の構築の場面を親子関係の初期と真実告知の場面に分けて分析し、３節では子どもの「アイデンティティ」形成の支援を実親と交流がないケースと交流があるケースごとに分析した。４節では家族外の他者に対してどのように「スティグマ」のマネジメントを行なっているのかを分析した。５節ではこれらを考察し、子どもに対して適切な働きかけを志向すればするほど、専門家言説が参照され、専門家言説が扱っている〈血縁〉が召喚されること、また養親は同化戦略と異化戦略を使い分けるが、それはどちらも社会規範を脅かさない戦略であることを示し

た。

８章では、親子関係でどのように血縁が浮上するのかを子の視点から分析するために、養子として育った 10 ケースを対象とし、養親子関係、「アイデンティティ」の葛藤、実親に対する定義などについて分析を行った。１節でケース概要と８章の分析視点を解説した。２節では親子関係の構築について、真実告知を学齢期までに受けたケースと青年期以降に受けたケースごとに分析し、３節では「アイデンティティ」の構築について、４節では実親の定義について、それぞれ実親と対面したケースと対面していないケースごとに分析し、５節では家族外の他者に対してどのように「スティグマ」のマネジメントを行なっているのかを分析した。６節ではこれらを考察し、養子が社会規範の相対化と内面化を同時に行いながら、養親子関係をマネジメントしていること、「アイデンティティ」の葛藤には情報の欠如だけではなく、社会規範が影響していること、実親と交流する際には新しい役割カテゴリーを創出することを示した。

９章では、役割移行の際にどのように血縁が浮上するのかを分析するため、８章と同じ 10 ケースを対象とし、役割移行を画期点とした際の親子観の変化と養子縁組をする意向について分析を行った。１節でケース概要と９章の分析視点を解説した。２節では定位家族に関する経験の再解釈について、３節で生殖家族に関する展望について、それぞれ生殖家族を形成したケースと形成していないケースごとに分析した。４節ではこれらを考察し、親子関係の構築について具体的には、親子観の変化と養子縁組をする意向が実際に生殖家族を形成しているか／いないかという点に大きく影響を受けていることを示した。

10 章では、４章～９章までの分析結果を統合して考察を行なった。考察の際には①法律における〈血縁〉と親子関係（１節)、②運用における〈血縁〉と親子関係（２節)、③親世代の行為と意識（３節)、④子世代の行為と意識（４節)、ごとに考察を行なった。１節では、実子でもなく養子でもない第三の類型（＝特別養子）が創出されたが、それは子どもをスティグマ化する効果があったこと、親子関係と〈血縁〉を分離したが、一方で、「アイデンティティ」と〈血縁〉が強く接続されたことなどを論じた。２節では、養親子が非血縁親子であることおよび子どもにケアが必要なことから、「子どものため」の専門家言説が援助実践で用いられていること、援助実践の内容は当事者にとって抑圧的でもあること、また隣接領域の制度との差異化と正当化のプロセスで「子どものため」という言説がより強化されていることを論じた。３節では、「養子縁組する／しない」と当事者が語る血縁へのこだわりは常に対応するわけではないこと、子どもへの適切なケアを志向すると「子どものため」の専門家言説と接続した〈血縁〉が浮上すること、「子どものため」の援助実践によって葛藤を抱えることがあってもそれが不可視化される構造があることなどを論じた。４節では、養子の葛藤が「普通なのか／普通じゃないのか」というあいまいさに起因すること、「ルーツ探し」の言説は「アイデンティティ」強迫になっていること、葛藤が無効化・不可視化される構造があることなどを論じた。これらの結果から、「子どものため」に血縁を重視する近年の動向は当事者に葛藤を引き起こしている側面があることを主張した。

11 章では、10 章までの分析・考察を総括し、本研究の意義と家族社会学に対しての示唆を論じた。具体的には、従来の行為と意識を等値し、血縁の強弱をとらえようとする先行研究に対して、血縁が浮上する局面、その時の他の知・言説との結びつき、その効果など、血縁が浮上するダイナミズムについて分析する本研究の分析枠組みの現代的な意義を示し、それが他の非血縁親子の分析にも応用可能な点を論じた。また、家族社会学に対する理論的な示唆として、①血縁を強調する議論と血縁を捨象する議論の架橋、②二項対立を超えた家族変動を分析する視点を提起し、今後の課題と展望についても論じた。

以上